
馴浪学園 ナロウ・ガクエン

パラディンスレイヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馴浪学園 ナロウ・ガクエン

【Nコード】

N0933Z

【作者名】

パラディンスレイヤー

【あらすじ】

自信家でプライドが歪んで、頭の中がある意味ファンタジーな高校生・堀内斗ホリ ナイト。そんな彼が馴浪学園で楽しく学生ライフを送ったり、「超能力者」として色々な人と闘ったりする話。『僕はもつと評価されるべき人間でしょ？』その自惚れぶりが世界を揺るがす……なんてな！

この物語は所詮フィクションであり、登場する人物・団体・サイト・事件等々は、実在のものとは一切関係ありません。あしからず。

Aさんのブログ（前書き）

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・団体・サイ
ト・事件等々は、実在するものとは一切関係ありません。

Aさんのブログ

皆さんこんにちは

もうすっかり冬の季節ですが、いかがお過ごしでしょうか

私の方はといたしますと、クリスマスや年末に近づくとつれて忙しさが増していくばかりです

部屋の整理整頓から大掃除などなど

ですが学校の場合、もっとごたごたとしてます

それも私の同級生の「H」のせい

思い出すだけで何だかムカムカしてきたので、今から「H」の愚痴をこぼします

だから閲覧要注意です

彼と同じクラスになってから随分と経つのですが、未だに馴れません

彼は顔はそこそこ、まあまあな身長、成績は優秀でスポーツも卒なくこなせる優等生

一見すればクラスの人気者フラグが立ちそうなんですが、実は陰で

嫌われています

ひがみ？

いえいえ、そんなんじゃないありません

自分が優等生であるのをいいことに、偉そうに上から目線で他人をこき下ろしたりするんですよ！

痛々しいほどに自信家なんです

しかも彼は「micctety」ミククティで自分を崇める信者を集めて上に立つとしてるんです！

ちよつとでも気に入らない、不都合な人間に対しては、誰彼構わず攻撃します

馴れ合う仲間や信者以外の意見は受け付けられないようです

私も違う名前で登録してるのですが、正直関わり合いたくありません
ただど彼に表立った批判はできず、どっかのサイトで色々と不満を打ち明けてます

現に私もこうしてるくらいですし

とにかく私は彼が嫌いです

まるでこの世界の？歪み？そのものですね

彼の名は 、掘 内斗(前書き)

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・団体・サイ
ト・事件等々は、実在するものとは一切関係ありません。

彼の名は、堀内斗

「やれやれ、学校が終わればいつもこれだよ。いや、人気者は辛いな。……なんてな！」

そう満足気に、さもイヤラシ気に笑う男子校生。制服のブレザーの左胸にあるエンブレムは、？互いに助け合う人々？を表してようにも、？ただ馴れ合っているだけの様子の人々？を表しているようにも見える。

彼の周りには、いくつもの人間達が重なり合って倒れていた。

「最近の僕はリア充ならぬ『リア重』なんだよ。現実リアルが大変？重実充実？してるからね。」

悪いけど、君達に付き合うほど僕は暇じゃないよ？」

その場で唯一平然と立っているのは、その手に？稲妻の走る槍を持つ彼の他に誰一人いなかった。そう、ここで人が何人も倒れているのは全て、彼のしわざである。

「何束なんたばになって僕に齒向かっても無駄なのに、君達は学習能力というものが無いのかい？」

彼は、自身の持ち得る力が他より優れてるからといって、勝ち誇っていた。

「僕はあくまでも僕であり、僕の生き方について何と言われようと僕は信念を曲げることはないからね？ ……アディオス？」

キリッ、と決めた台詞にドヤ顔。手に持っていた槍は僅かな閃光と共に消え、ルンルンな様子で彼はその場を後にする。

倒され、気を失ってる者達はただ沈黙するだけであった。

彼の名は、堀内斗ホリナイト。馴劣学園高等部一年の生徒だ。

これまでに彼は、要らぬ敵をたくさん作ってきた。そしてこれからも作り続けていくであろう。

いずれは世界をも敵に回すかもしれない彼の行く末とは？

彼の名は、掘内斗（後書き）

次回、本編始動！

怖い夢を見ました(前書き)

この物語は当然フィクションであり、登場する人物・団体・サイ
ト・事件等々は、実在のものとは一切関係ありません。

怖い夢を見ました

「どうなってるんだよ……」

濁った灰色の空。

濁った空気と、辺り一帯に立ち込める黒い煙。

倒壊した百貨店やビルの群れ。

まばらに千切れてるモノレールの橋。

あちらこちらの地面にできた大きな裂け目やクレーター。

「マジで訳わかんないんだけど……」

廃墟となった街のスクランブル交差点に、ボロボロの制服姿の少年は立っていた。

自身がさっきまで何をしてたのかはおろか、何故ここにいるのが判らなかつた。そして何故街がこのような悲惨な姿となっているのかも。

だが、これらの元凶に何故だか自分が大きく関係しているように思えた。否、思えずにはいられなかつたのだ。

「そのとおりだよ掘内斗……」

「誰だ」背後から声がし、すぐ様振り向く内斗。

そこにいたのは、自身と同じくボロボロとなった制服をまとう少年であつた。だが、顔は面を付けているため分からない。心の中を読まれたらしく、内斗は焦っていた。

一方相手の少年はというと、落ち着いた様子である。その面は、内斗を嘲笑うかのような表情をした醜い悪魔の顔であつた。

「こつなってるのも全て僕が関わっているだ……！？ 教える、そして君は誰だ！」

「お前の質問に答える義理は無い」面の少年は言う。面と同様に内斗を嘲笑しているのであろう、含み笑した声が漏れていた。

「何がおかしい……！」内斗が再び問う。

「答える義理は無いと言ってるだろ、同じことを何度も言わせるな」
当然の反応であった。この少年にいくら問いかけても平行線をたどるばかりであろう。

内斗が困惑しているその時、自分達の立っている空間が突如歪み始めた。

「う……！」

内斗は目眩めまいと吐き気を覚える。息をするのも苦しくなり、まるで肺と胃が重力によって押し潰されそうな感覚だった。

あたり一帯の壊れた建物や地面から色彩が抜けてモノクロに変わる一方、空が赤く染まる。美しい夕日とは違う、気味の悪い赤だった。見上げれば、そのまま吸い込まれていきそうに感じられる。

「さあ、さっきの続きをしようか、堀内斗……、いや？聖シャイン？！」

意味深なことを口にした瞬間、面の少年は黒光りに包まれた。
人の形をした黒い塊から何か大きな二つのものが生えた刹那、黒い稲妻が弾け飛ぶ。

「……お前は」

そこに姿を表したものを見て内斗は驚く。

赤黒く、硬そうな皮膚。

鋭く伸びた黒い爪。

肘、肩、膝、腹など所々にある刺々しい突起物。

熊にも狼にも似た頭部に、赤い眼と鋭い牙。

そして、悪魔の翼。

「お前のエセ英雄譚も今日で終わりだ……、死ね！」

異形の化け物となった少年は、空気が割れるかと思えるほどにおぞましい雄叫びを上げながら内斗めがけて突進してきた。

内斗は恐怖のあまり体が動かず、自身に秘められた雷の力を引き出せなかった。

時間がゆっくりと流れていくのを彼は感じた。ゆっくりと迫って

くる怪物。そうか、恐怖が頂点に達すると時間の流れがこうもスロ
ーペースになるのか、と思った。一秒一秒が重い。自身の？リア重
？も今日で終わりかと。気がつくとすぐ目の前まで迫っていた。

「……？邪ブラック？」

両腕の爪が降り下ろされた時、内斗は無意識のうちに呟いていた。

「起きなさい、堀くん」

「はひ？」

目を覚ました内斗が突っ伏していた机から顔を上げると、そこは
いつも通りの変わらない授業の風景があった。

周りを見渡すと、くすくすと笑い声やらぶつぶつと悪口を呟く声
やらが聞こえる。

見上げれば、そこにはかんかんとなった美人女教師の顔が。

「あなた、自分が勉強できるからって、この間も授業サボって提出
物も出さなかったでしょう！？」

ただでさえ授業態度が悪いのに、これ以上評価を落としてどうす
るんですか！」

「……真黒先生、そんなに怒ってるとしわが増えますよ」

「なっ！？」

「きつと婚期だって逃しますよ」

その時だった。内斗の左頬が硬い何かを捉えたのは。そして無意
識なうちに彼は廊下側を向いていた。つまり、寝ぼけてたあまり挑
発してしまった内斗は、かつとなった真黒の右拳を受けたのだ。

「あ、れ？」

クラス中の空気が静まり、我にかえる真黒。

「あ、あはは、あはは……、ごめんなさい？ 目を覚まさせてあげ
ようとしたら、つい力がはいっっちゃって……」

無理やり作り笑いをしながら、教壇へ彼女は戻った。

「という訳で、この問題は……」

真黒が授業を再開させる一方、いきなり殴られて不快に感じてい

る内斗は恨めしそうな目をしていた。

「……絶対いつか、弱みをたくさん握って僕の奴隷にしてやる」
彼から発する黒いオーラに、周りの席に座るクラスメイト達は引いていた。

帰り道、内斗は色々と考え事をしていた。

授業中に見た夢は一体何だったのか。そして、あの真黒をどのよ
うに辱^{はた}め^かてやろうかと。とりあえず家帰ったら、まずは「mic
tety」で信者となってくれてる奴らと戯れてやるか。

そう思いながら今日も一人で帰る内斗。その後を付けている影に
気づくこともなかった。

【T o b e c o n t i n e w e d】

あれは一体何だったのか分かんなかったけど、そんな事より爺はどうした？（前

何故か廃墟の街の中で異形の怪物に襲われた？夢？を授業中に見ていた堀内斗ホリナイトは、帰り道に色々と考え事をしていた。

あの夢は一体何を意味するのか。

そして、夢の中で無意識のうちに呟いた？邪ブラック？とは？

？聖シャイーン？とは？

一方、そんな彼を何者かが後を付けていた。

あれは一体何だったのか分かんなかったけど、そんな事より爺はどうした？

住宅の建ち並ぶ坂を抜けて自宅に着いた内斗は、ポストから新聞の夕刊を取り出した。

その一方で、坂の道端に停めてある車の陰から彼を見つめる者がいた。同じ馴浪学園ナロウの制服の青年である。

（あれが堀内斗の家か。親が海外出張で執事やメイドが世話していると聞いていたが、それだけに随分と広い屋敷だな）

見渡した先のもに青年は圧倒されていた。寒色系のタイルやレングが美しい外観の豪邸。囲っている柵さくからは外観の緑の人工芝やプール場と思わしき施設まで見える。大金持ちなのであろう。

（くう、あいつはこんなただっ広いところに住んでやがるのか……！）

嫉妬しつとで顔をひきつらせつつ、内斗が玄関の中へ入っていくのを確認すると青年は、掌てのひらを前に突きだした。

「来い、？風の寄生虫？」

力と念を込める。するとその先に蒼い風が螺旋状らせんに流れながら一カ所へと集まっていた。

そして、羽の生えた芋虫いもむしのようなものが形成されたのだ。

「さあ、奴の巢ねに寄生してこい。そして奴の苦しむ姿を存分におれに見せてくれ」

青年は豪邸の門へ向けて放つ。不気味な音を立てながら羽を振動させながら門に近づくアオムシ。

だがしかし、門を潜る所まで進んだ途端、光の膜が現れて弾き出されてしまう。

「？聖なる結界？……だと？」

そのまま地面に落ち、蒼い残像とともに風となって消滅するのだった。

「ちっ、さすが堀内斗……、なかなか抜け目がねえな」

青年は、携帯電話を懐ふしから取り出した。

「枯葉カレハだ。何らかの能力により？聖なる結界ブロック？を張り巡らされており、潜入不可……」

連絡を済ませた青年、枯葉は携帯電話を元に戻し、恨めしそうに豪邸屋敷の外観を見渡す。

「？聖なる結界？……、一度マーキングした相手の能力を一切寄せ付けないという絶対防御か。だが」

そう言っただけ彼は再び掌を突きだす。

「あくまでも『外側からの干渉だからこそ防げるもの』だという事を分かってないようだ。見えるぞ……、節電セツノウならぬ？節能？で内側の守りがスカスカだ」

同じように力と念を込めて？アオムシ？を形成する。先ほどの比べて一回り小さいが、代わりにとどころが刺々（とげとげ）しくなっている。枯葉の口元が微妙かすかにつり上がっていた。

「さっきのは『飛行』タイプ、そして今は『地這いちほ』タイプ。押し駄目なら引いてみる……、そんな訳で地中から侵略するぜ、フヒヒ」

『地這いタイプ』を隣の家の庭へ放り入れてその場を後にする枯葉。だが、

「お兄ちゃん、さっきから何ぶつぶつ言ってるの？」

「ひっ!?!」

下校途中だったのか近くを通りかかったランドセルの女の子達に不振に見られてしまったのであった。

カランカラン、と玄関の扉の上に吊るしてある鈴の音が屋敷の大広間中に鳴り響く。

それは、この豪邸の持ち主の一人息子の帰宅を知らせるものであった。

「おい免責爺めんせきじい。帰ったぞ」

床や階段を清掃している者達。

調理室にて食料を配分したり整理している者達。

玄関から見える吹き抜けの廊下の装飾をしている者達。

役割は違えどそれぞれの仕事を全うまっとうしていた使用人達が一齐に作業を中止させ、広い玄関の大広間まで駆けつけた。

「お帰りなさいませ、内斗様！」

「学校は楽しかったですか！？ お友達も増えましたでしょうか！？」

「今日もご無事で何よりです！」

「いや、内斗様の事だから心配で心配で昼も眠れませんでしたよ」

何やら出迎えの言葉がだんだんと妙な方向へズレていつてるようだが、内斗は別に気にしてない。この使用人達も彼同様にズレているからであって、本人にとってもそれが当たり前となってしまうているのだ。端はたから見れば、？類は友を呼ぶ？という言葉がしつくりとくるであろう。

「ところで爺はどうした？ ……今朝から姿が見えないので気になつてたんだが」

広い玄関口に迫る使用人達の中に一人だけいないのを不思議に思った内斗は、呼び掛けた。

使用人達は他の者と顔を合わせながら、はてなマークを浮かべている。

と、その時。

「あ。そういえば、？探しもの？があると云って地下の書物庫に行つたきりだ……」

使用人の一人が、突然真っ青な顔でボソツと呟いたのだ。

「なんだって？」

「すつ、すみません、免責じ……執事長は『暫ひんじく放つてくれんか』と言うもんですから。もともと髪が薄い……じゃなくて影が薄いので、すつかりと忘れておりました」

「という事は、存在を忘れられたまま今もずっと地下に閉じ込めら

れてる訳か……」

「本当にすみませんでした！ それでは直ちに開けて参りますっ！」
真つ青な顔をした使用人は、慌ただしく玄関の大広間を出ていき、
一方で内斗はやれやれと頬を掻く仕草を取るものであった。

使用人を他の仕事へ駆り出した内斗は、一人で薄暗い地下書物庫
の中にいた。

「免責爺、生きてるなら返事をしてくれない？ おい、免責爺？」

携帯電話のカメラフラッシュ機能をたいまつ代わりに進んでいく。
内部構造は、低めの天井まで届く木製の本棚が壁となって迷路のよ
うに複雑に入り組んでいる。

整然と並べられた本は、どれもかなり古そうに見えた。掘家代々
が大切にしているものだとは知っていたのだが、このように放置さ
れているようなものに一体どこにそんな価値があるのかは内斗には分
からなかった。

「こんな邪魔なもの、さっさと処分すればいいのに」

歩くこと数分、内斗は何やら生暖かい空気を感じ取った。奥に進
めば進むほど、肌に触れる温度が上昇しているのが伝わってきてい
る。

(何かいる……！)

一度立ち止まり、深く息を吸う内斗。たいまつ代わりの携帯電話
を握る手が汗ばんでいるのは、空間の温度上昇によるものなのか。
それとも、未知のものに対してどこか畏怖いふの念を懐いだいてるせいなの
か。

だが、ここで立ち止まっても仕方ないのは判っていた。もし先日
のように自分に襲い来るような輩が潜んでいるなら、持ち得る力で
叩き伏せるまでだ、と思っている内斗。自身の不安材料は見つけ次
第、潰す。それが彼のスタンスの一つでもあるからだ。

よし、と意を決して前に進もうとしたその時。

「坊っちゃん！ 何故ここに!？」

「うわあ……!？」

奥から突然姿を表した、黒いスーツを着用した初老の男に内斗は驚く。

互いに視線を合わせながら少しの間だけ沈黙が流れた。そして、口を開いたのは内斗の方である。

「そっちこそ、何でこんな所にいるんだ、爺？ 名前は忘れたが使用人Gが言つてたぞ、『探し物』がどうとか」

「よく名前を出すのにイニシャルしか覚えて貰えないとか、彼はなんと不憫な……。しかも『爺』と言つた後にアルファベットの『G』を言うのは紛らわしいですな……」

「どうでもいいから答えてくれよ。僕ですら立ち寄つた事のないこの場所で何をしてたんだ。それと、この空気は何だ」

内斗は、？自身の捜していた相手？に対して問いたです。

「……とうとう坊っちゃんに全てを話す時が来たようですな」

先ほどまでふざけていた表情が少しだけ真面目なものに変わった爺は、コホンと一息入れて語り始める。

「坊っちゃんは『聖シャイン』というものをご存じですか？」

「なんか、夢で聞いたぞ……!」

それは内斗が授業中に寝ていた時に見た夢だった。あの荒廃した街の中、何かおぞましい存在に襲われる前に聞いた言葉。

やはりただの夢じゃないと思つた内斗は興奮して、空いた方の手で爺の右肩を掴んで揺さぶつた。

「教えてくれ、何なんだそれは一体!？ なんか気がついたら街や道路とかが壊された中にいて、それでワケ分からない奴に言われたんだよ、『聖シャイン』って!」

「お、落ち着いて下され坊っちゃん！ まずは簡単な説明から……」
内斗は揺さぶりを止めたが、鼻呼吸が荒くなっていた。あの時見

ていた夢が妙にリアルに感じられていた。そして頭の中から離れなかつた。だから何か重大な真相を知っている人がいるのであれば、聞かすにはいられなかつたのだ。全ては自身の不安材料を無くすために。

「……いいだろう、話せ」

「とりあえず付いて下され」

奥へと進む爺に内斗は付いていくことにした。本棚の壁による曲がり角を伝っていくと、次第にうつすらと明るくなり始めていった。やがて一番奥と思われる場所にたどり着くと、書類や明かりの点いた電気スタンドやらが並べられている机があつた。よく見ると引き出しから青白い光が漏れている。

「なあ爺……、まさかとは思つが、あの引き出しの中に入るとタイムマシンがあるって訳じゃないよなあ……?」

「某猫型ロボットはおらんが、?過去の世界?へは行けませんぞ」

「……………え?」

「とりあえず説明するにはそこがいいと思ひましたの。では行きますかの」

「ちょ!?! 話もいきなり過ぎてわけ分かんないって!」

爺は引き出しを開けて何かを取り出した。そして内斗は発光元が爺の手にある?懐中時計?である事を知つた。

「では、出発ですじゃ!」

爺は内斗の手を取り、時計の側面にあるネジを回した。すると

「おい爺、ヤバくないか……」

突然、ズーン、と何か鈍い音が二人の聴覚に重くのし掛かつた。

視界に映るものから着色も消えてモノクロになっていった。

そして、ゆっくりとねじれ始めたのだ。

やがて原形も分からなくなるほどに景色は歪み、その中で内斗は次第に意識が薄れていった。

【T o b e c o n t i n e w e d . . .】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933z/>

馴浪学園 ナロウ・ガクエン

2011年12月18日23時52分発行